

ヘミングウェイ作「雨の中の猫」の イタリア語を「復元」として —仮説と解釈—

A hypothetical restoration of the exchange in Italian
in Ernest Hemingway's "Cat in the Rain,"
or "Mystery and Melancholy of a Public Garden"

山名 章二¹

¹大妻女子大学

Shoji Yamana¹

¹Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8357 Japan

キーワード：ヘミングウェイ、「雨の中の猫」、イタリア語「復元」、ジョルジョ・デ・キリコ、
「通りの神秘と憂愁」

Key words: Ernest Hemingway, "Cat in the Rain", Italian "restored", Giorgio de Chirico,
"Mystery and Melancholy of a Street"

抄録

標題作の対話部分には英語とイタリア語とが使われている。ある箇所では、地の文から判断してどちらの言語が使われているかが明確である。他方、プロットの流れの中で推定可能性に幅がある箇所もある。さらには、明らかにイタリア語として奇妙なところがある。これらを可能な限り「復元」してみると、登場人物であるアメリカ人女性のイタリア語とフランス語、特に前者における運用能力の不足が大きな役割を演じていて、その揺れこそがプロット内での彼女の実態を具現し、そして、そのように捉えられたアメリカ人女性がホテルの人々と夫とのそれぞれを相手として、意思の疎通の齟齬あるいは希薄な共感に前後から封じ込められた状況が、この小説の趣意の中核であると見ることが可能になる。

さらに、画家ポール・セザンヌがヘミングウェイに芸術的な影響を与えたとは定説だが、上のように捉えられたこの小説は、ヘミングウェイと同時代を生き、また、ヘミングウェイがピカソをはじめとする芸術家たちとの交流の中で触れあうことがあったはずと推測されるジョルジョ・デ・キリコ、特にその「形而上絵画」からなんらかの影響を受けた可能性、少なくとも、それぞれの作品「雨の中の猫」（1925）と「通りの神秘と憂愁」（1914）とがそれぞれに喚起する想像力の親縁性を類推させずにはおかない。そして、類推の中心には、小説の全体とアメリカ人女性が見たものの誰一人その「客観的真實」の存在を証言するものがない「戸外のテーブルの下に雨やどりする猫」と、キリコのより後の時代の作品に大きな役割を果たすものではあるが、絵画の全体とそこにおける「形而上的要素」とが、形式及び意味合いの上で響き合う類似性がある。

これはあくまでも1篇の小説をめぐる思考実験であり、ヘミングウェイの著作全般の見渡しと背景の検証を欠き、先行研究を踏まえていない。そして、キリコについても取り組みが十分ではない。大方の批判を願う所以である。

はじめに「雨の中の猫」の内、議論の主な対象となる部分の「通常」のテキスト版を提示する^[1]。

The wife went downstairs and the hotel owner stood up and bowed to her as she passed the office. His desk was at the far end of the office. He was an old man and very tall.

‘**Il piove,**’ the wife said. She liked the hotel-keeper.

‘**Si, Si, Signora, brutto tempo.** It’s very bad weather.’

He stood behind his desk in the far end of the dim room. The wife liked him. She liked the deadly serious way he received any complaints. She liked his dignity. She liked the way he wanted to serve her. She liked the way he felt about being a hotel-keeper. She liked his old, heavy face and big hands.

Liking him she opened the door and looked out. It was raining harder. A man in a rubber cape was crossing the empty square to the cafe. The cat would be around to the right. Perhaps she could go along under the eaves. As she stood in the doorway an umbrella opened behind her. It was the maid who looked after their room.

‘You must not get wet,’ she smiled, speaking Italian. Of course, the hotel-keeper had sent her.

With the maid holding the umbrella over her, she walked along the gravel path until she was under their window. The table was there, washed bright green in the rain, but the cat was gone. She was suddenly disappointed. The maid looked up at her.

‘**Ha perduto qualche cosa, Signora?**’

‘There was a cat,’ said the American girl.

‘A cat?’

‘**Si, il gatto.**’

‘A cat?’ the maid laughed. ‘A cat in the rain?’

‘Yes, –’ she said, ‘under the table.’ Then, ‘Oh, I wanted it so much. I wanted a kitty.’ When she talked English, the maid’s face tightened.

‘Come, Signora,’ she said. ‘We must get back inside. You will be wet.’

‘I suppose so,’ said the American girl.

ついで、イタリア語を「復元」し、さらに僅かながら修正を加えた版を提案する^[2]。

The wife went downstairs and the hotel owner stood up and bowed to her as she passed the office. His desk was at the far end of the office. He was an old man and very tall.

‘**Il piove,**’ the wife said. She liked the hotel-keeper.

‘**Si, Si, Signora, [fa] brutto tempo.** It’s very bad weather.’

He stood behind his desk in the far end of the dim room. The wife liked him. She liked the deadly serious way he received any complaints. She liked his dignity. She liked the way he wanted to serve her. She liked the way he felt about being a hotel-keeper. She liked his old, heavy face and big hands.

Liking him she opened the door and looked out. It was raining harder. A man in a rubber cape was crossing the empty square to the cafe. The cat would be around to the right. Perhaps she could go along under the eaves. As she stood in the doorway an umbrella opened behind her. It was the maid who looked after their room.

‘**Non deve bagnarsi,**’ she smiled, ~~speaking Italian.~~ Of course, the hotel-keeper had sent her.

With the maid holding the umbrella over her, she walked along the gravel path until she was under their window. The table was there, washed bright green in the rain, but the cat was gone. She was suddenly disappointed. The maid looked up at her.

‘**Ha perduto qualche cosa, Signora?**’

‘**C’era un gatto,**’ said the American girl.

‘**Un gatto?**’

‘**Si, il gatto.**’

‘**Un gatto?**’ the maid laughed. ‘**Un gatto nella pioggia?**’

‘**Si, –**’ she said, ‘**sotto il tavolo.**’ Then, ‘Oh, I wanted it so much. I wanted a kitty.’ When she talked English, the maid’s face tightened.

‘**Venga, Signora,**’ she said. ‘**Dobbiamo rientrare. Si bagnerà.**’

‘I suppose so,’ said the American girl.

「復元」版は、論考の結果として最後の部分に記すものとも思われるが、ただ比較の便宜のために「通常」版に続いて記した。

論考の中心的な要素となるアメリカ人女性のイタリア語能力の推定される実態を確認するために施した工夫を数点指摘する。まず、太字体は議論のポイントを際立たせるためであり、そのために仮説1以降の文中でも時に使用するが、

- ① もとからイタリア語で表記されている部分はローマンで太字体とし、その範囲内で、何らかの理由で表記されていないが、イタリア語としては欠けているのが不自然な表現を、同じ字体で各括弧内に補った。
- ② もとは英語表記だが、描写からイタリア語であることが明白な部分、およびその可能性が高いと推定した部分は、斜字ボールド体のイタリア語表記に変更した。そして、
- ③ 英語で表記されてはいるが、実際には発せられなかったと解釈できる箇所は取り消し線を使用した。

【仮説1】 短篇小説「雨の中の猫」では、作中人物アメリカ人女性のイタリア語との格闘が重要な要素である。

1

「雨の中の猫」は、ヘミングウェイの作品集の他に、複数の作家による短篇作品選集におさめられることも多く、文学愛好家の共有財産になっている。高い評価と相まっての結果と言えよう。また広く論じられて久しく、積み重ねられた議論は高度な水準に達しているようである。この小論は、しかし、先行する専門的な研究を緻密にふまえて百尺竿頭・・・といった方向づけを持つものではない。

論考はイタリア語が使われているこの小説を原語で、すなわち、「通常版」で何回か読むうちに覚えた疑問が出発点である。まず、特定の言語名を目的語とする場合、英語の動詞‘talk’と‘speak’とが意味用法を異にすることを再確認し、同時に、引用部分21行目、終わりから5行目に始まる、この差異を含み小説の解釈上も転換点となる記述、When she talked English, the maid’s face tightened.

および、メイドをめぐる最初の記述、‘You must not get wet,’ she smiled, speaking Italian. に促され、「実際には」どちらの言語が話されているのかと思い及んだことにある。「実際」に行われたやり取りを「復元」すると、コミュニケーションの滞りが絡むこの小説の受け止め方を変えるか、という問いである。

ヘミングウェイ自身は版本のとおり書いたのであり、語法の原則にも則って、書かれているとおりに受けとめるべきで、ここで試みるような「復元」など邪道であるとの批判はなされるだろうし、‘Il piove.’への注釈による捉え方で納得できるならば異論を立てる理由はない。しかし、疑問を後押しするものがあつた。それは、イタリア語として疑問を禁じえない表現が目にとまったことである。上の本文6行目、アメリカ人女性の第一声‘Il piove.’と、引用後半のイタリア人メイドの発話‘Ha perduto qualche cosa?’である。これらの表現に対する違和感が「復元」する関心をかきたてたのである。

まず‘Il piove.’は作品集の編者、教科書版の注釈者などの注意も引いている。共通する捉え方は「(イタリア語としては不規則的ながら、) It’s raining.の意」と要約される。文脈から、女性はそう言いたいと判断され、ホテルの支配人もその趣旨で応対している。しかし、pioveは動詞piovereの直接法現在三人称単数の活用形で、自動詞としての用法では「雨が降る／降っている」を意味し、一ノ瀬俊和によれば¹³⁾、「雨が降る」は現在形がpioveで、非人称構文であり主語をとらない。つまり、「雨が降る／降っている」なら、‘Piove.’で十分である。非人称構文であり、主語の議論は無用だ。そもそも、イタリア語のIlは男性単数定冠詞であり名詞を要求する。引用部分中の後半にもあるとおり、「雨」に中る名詞pioggiaは女性名詞であり、定冠詞はlaをとる。イタリア語として‘Il piove.’が「不規則」を通りこし、非文であることは明白だ。

しかし、著作意図の重要な一部として、ヘミングウェイはこのような非文を採用したのだ、と推定する。第一次世界大戦に赤十字の一員として北イタリアの戦線に赴いて以来、帰国するなど中断はあつたにしろ、この小説(1925年刊行)の執筆に至る間、イタリアを含むヨーロッパでの滞在、生活、活動が十分に長く、関連性が多々ある諸言語の環境に身をおいていたヘミングウェイが、特

に日常表現相互の類似点や相違点になじんでいたとも推測され、これほど基礎的なイタリア語の日常表現が非文と意識されずに作品に書き込まれるとはとうてい想像できないからだ。

加えて、フランス語混用の可能性を措定すると、推測が展開する。すなわち、このアメリカ人女性はフランス語をわかまえていて、「雨が降る／降っている」のフランス語表現 **Il pleut** と混同して **Il** と言い始め、そのまま、イタリア語の動詞表現 **piove** を言い添えた形ではないか。すなわち、ヘミングウェイはフランス語をわかまえているが、イタリア語の運用力が初歩的で発話に混乱がある人物を構築したのだ。フランス語についても、イタリア語と同様あるいはそれ以上に、ヘミングウェイの経験と認識を推測することは大きな誤りではないだろう。それを踏まえて、短い1文を最初に導入し、いち早く物語の方向性を定着させたのではないか。

【仮説2】 イタリア語で表記されている部分は、不規則な箇所を含め、アメリカ人女性が自ら発したもの、および、聞き取ったものである。

2

‘**Ha perduto qualche cosa?**’も推測を誘う。一見正当なイタリア語と思わせ、特に疑問視もされず、**Have you lost something?** と注釈されるが、正当なイタリア語ならば、**Ha perduto qualche cosa?** または **Ha perduto qualcosa?** となるところだ。インフォーマントは版本の表記を異常と指摘し、「普通は」と言い添えて後者を提示した。いずれにしろ、版本の表記はイタリア語の母語話者と思われるメイドが発しているとは思えない異常である。また、ヘミングウェイがこのように混乱した発話を書き込んだ経緯は、上に見た‘**Il piove**’と同様に意図的なものとする。問題はこの混乱についてなにが言えるかである。

推測できることは、フランス語をわかまえているこのアメリカ人女性が、実際には、上記のような正当なイタリア語文、**Ha perduto qualche cosa?** を耳にしていたということだ。二人称の人物に敬意を込めて用いられる三人称構文で **Ha perduto** と言い始め、目的語部分、英語の **something** に中る **qualche cosa** は、フランス語の **quelque chose** をかぶせた表記と思われる。そして、そのような

混乱のある聞き取り方を描写するために、形容詞部分を両言語の中間体とでも言えそうな **qualque** と綴り、続く名詞部分には、アメリカ人女性がそうと聞き取った **cosa** をそのままに添えた形で表記したということではないか。

たしかに、伝達動詞節における主語表現を仔細に見ると、ヘミングウェイは、それぞれの人物の発言を特定人物の視点によるのではなく、俯瞰的な作家の視点から「客観的」に記述している、それぞれの人物に自然な発言が設定されている、との主張はされるであろう。しかし、上に見たような二つの言語の混乱を窺わせる表記が、ルールの枠内で生じている不規則な事態を推定させるのである。

【仮説3】 さらに、イタリア語で話されているとの明確な記述が加えられず、英語で表記されている部分（の大半）は、イタリア語で発せられながら、アメリカ人女性が了解できたものである。

3

引用部分冒頭のホテルの主人の応対は、‘**Si, Si, Signora, brutto tempo. It's very bad weather.**’と記されている。これは、一読、外国人滞在客の発した非文の真意を推測し、素早くイタリア語で応じ、しかも、対応する英語表現を親切に言い添えた形だと言うことはできよう。優れた言語能力の証とも、また、すぐ後で女性客が評価している“his deadly seriousness”を表すともとれる。英語の **Yes** に中る **Si** が繰り返されているが、この場合、アメリカ人女性の不規則な発話を聞いた応答の一瞬のとまどいを取りもどそうと、肯定の返事をいそぎ繰り返す、わずかに生じたコミュニケーションの不調を帳消しにしようとしたと思われる。英語や日本語でもそのような趣旨で“**Yes, yes**”や「ハイ、ハイ」「ええ、ええ」「そう、そう」と口早に応じるふるまいはありふれたものであり、この場面のように顧客相手のやりとりとしてもごく普通で自然なものだ。さらに、「ええ、ええ、ひどいお天気ですな」に中るイタリア語表現に続いて、引用符内に **It's very bad weather.** と英語で付け加えたように記されている。

この英語文は彼の高い英語運用力の証左であるかもしれない。イタリア語に困っているらしい

客に、イタリア語で応対しておき、相手の母語でいてねいに補足している可能性である。しかし、ここ以外には彼が発話する場面もなく、評価の根拠となるものがない。背景的にはホテルもオフ・シーズンか、戸外の様子からも海辺のリゾートとして旅行客が多いとは思われず、この宿にしても客が多いようには見えない。つまり、雨が降り続き商売に活気のない中で、ドルの威力をまとい、しばらくは出発する様子もないアメリカ人客のあれこれの不満や注文 (“complaints”) に応対する商売人の愛想の良いふるまいの一端かもしれない。しかし、別の角度から問うことは可能である。日本文学の多くの作品で、主に外国人人物がその母語などの外国語で話している場面で、外国語の発話とその趣旨を日本語で続けて表記する、という現象になじんできた。まとまった調査もせず、組織的な理論を持つわけでもないが、実際に日本語が発せられているとは受けとらず、外国語の趣旨を説明する書き添えであり、そのとおりの発話ではないものと長く受けとめてきた。が、ヘミングウェイだけでなく他の英語文学作品でもこの種の表記に意識的になったことはない。

しかし、上のような経験も踏まえ、仮説3は、両語混在の表記もアメリカ人女性のイタリア語、さらには母語の英語をも含むコミュニケーションそのものにもがく様子を表現するとの解釈を可能にし、ホテルの主人の発話の捉え方を絞り込む。まず、インフォーマントは英語文に先立つ **brutto tempo** は、普通は、それだけでは異常で、正しくは **fa brutto tempo** だと指摘した。読み込みが過ぎる可能性はあるが、アメリカ人女性がホテルの主人がやり取りの滞りを取り戻そうと早口で返したイタリア語の発話を聞き、これも非人称構文で、フランス語であれば *il* が主語として期待されるが、それを欠いた上での第一語の動詞 **fa** は戸惑いもあり聞きとれなかったものの、続く名詞表現は聞きとれたのではないか。そして、続く英語表現は、「英語で言えば、ひどいお天気ですなということよね」との了解の様子を記したもので、アメリカ人女性の安堵の表現とも言えるだろう。このように、物語冒頭のやり取りにおける両語混在の表記は、彼女のイタリア語を懸命に聞き取り、共感をまさぐる意思疎通の苦闘のテーマの布石であると言える。その意味で、**It's very bad weather.** は「イタリア語を復元する」版ではなくてよいと措定し、打ち消し線を引いた。

続く段落はこのようなテーマを、別の角度から際立たせる。そこにはアメリカ人女性の滞在客が宿の主人に好感を抱いている様子が、動詞 **liked** を用いてたまたみかけられているが、単なる好悪の表現ではない。好意をねだるほどに追いつめられた結果であると推測しては酷であろうが、例の大半は、そのように推測する根拠ともなるような、宿の主人との接触あるいは交流の諸相を記述するものである。実質は彼女自身とその振る舞いがどう受けとめられているか、そして、主人の挙動一つ一つに自分に対する好意的な評価に共感を確認して安堵する様子が痛々しいほどに表現されていると言える。言葉を聴き取ろう、心を読もうと相手を見つめ、特に表情に目を凝らして、不自由なコミュニケーションを全うしようと相手の口元を見つめる様子も含まれていよう。それは不十分な外国語を使って意思疎通を図ろうとするなら、その行動の要素としてありふれたものだ。

4

捕まえてきてあげようとの熱意のほども曖昧な夫の申し出を退けた女性は、猫を探して雨の中に出て行こうとし、焦点はメイドとの関わりに移行する。メイドを描写する '**You must not get wet, she smiled, speaking Italian.**' では、文尾の描写のとおり、セリフ部分をイタリア語に「復元」することに問題はない。アメリカ人女性がそのイタリア語を十分に聞き取った、あるいは、雨の中に出ようとしているところへ、傘をさしかけながら笑顔で語りかけられて、十分にはわからなくとも、好意的な配慮も併せ受けとめ趣意を了解した、とも言えよう。英語による表記は、そのような受けとめの成立を表現していることになる。その意味で、**speaking Italian** は不要とし、打ち消し線を施した。あわせて、その意味で注意して良いのは、**she smiled** である。**smile** は「声を立てず微笑む」が基本的な意味用法であり、この例のような直接話法の伝達動詞として「笑みを浮かべて言う」とする用法も成立してきたのであって、名詞の用法にも明らかなおおりに、本来は表情を説明する視覚的

な表現である。その意味で、ここでもアメリカ人女性の行動には、上に見たように、メイドの顔を見つめていた、口元を見つめていた可能性が高い。

ついで、メイドの「何かなくしものでもされたのですか」との問いとそれに応じる「猫がいたのよ」との返答以降、アメリカ人女性の「そうなの・・・」に中るところまでのやり取りは、語数も少ない平易な内容であり、アメリカ人女性も十分運用できる範囲内と考え、また、メイドが英語に切り替えたとする表現がないことから、全てイタリア語にした。ただ、その中でもともとイタリア語表記による **il gatto** は、インフォーマントが指摘するとおり、平常のやりとりでは不自然だと判断するが、発話者本人としては窓外に見た猫に想いを凝らし、定冠詞を用いた可能性はある。直後に一気に込み上げる思いの丈がほとぼり出ると思われるところには、**I wanted it so much. I wanted a kitty.** とあり、窓外に見た猫 **it** と一般論 **a kitty** とを明確に区別しているからだ。ただし、ここで強調されるべきは、**un gatto** と **il gatto** の違いそのものであり、それにより意思疎通のずれが決定的に提示されていることである。

続いて、‘Yes, -’と言い始め ‘under the table.’ と続く発話の最初の部分、そのカンマ以降に注目する。理由は後述する通り、その後続く **Then** 以下英語で話したとされる部分との落差だが、直前のこの部分は「本来」イタリア語で語られている。英語に替わるのはわずかとはいえまだ先である。女性客は ‘**Un gatto nella pioggia?**’ と問い糺すメイドに応じようとして、カンマの後のハイフンにより表される沈黙、すなわち発話の短い中断の後、**sotto il tavolo** と続けたのだ。沈黙／中断の理由は迷い／模索だ。だが、なんとか言いおおせる、そして「言いおおせた」意識が英語表記により示唆されていると考えられる。

このように懸命な発話努力へのメイドの反応は、その内容と併せ、いや、それ以上に動詞によって表現されている発声の様態のメッセージ性に意味深いものがある。今度は **laughed** であり、**smiled** ではない。すなわち、やっと出しおおせた表現、そしてその内容を、おそらく彼女が期待していたように、言うとおりに受けとめ、柔和に微

笑みながら、静かにあるいは丁寧に問い返すのではない。打って変わって疑念もあからさまな笑い声が、ある意味でおおらかに発せられ、その口元を見つめるアメリカ人女性に面と向かって投げつけられた、と言えるだろう。承認や激励を表す微笑みではない。おそらくは爆発的で「ありえない／そんな馬鹿な」との含意もあからさまな笑い声で、懸命な訴えに取りあっていないととれるであろう。邪気は含まれていなくとも、アメリカ人女性は嘲られた、あるいは侮られたととったであろう。

これを契機に物語は急展開する。そのマーカーは **then** である。ほとんど切り札のように出された副詞 **then** によって関心の切り替えを促していき、アメリカ人女性の思い余った感情の母語によるおそらくは早口の吐出が表わされている。内容は「私、猫が欲しかったの」に尽きるが、すでに見たとおり、窓外に見たものと一般論との区別は明確になされていて、当面問題外である。状況の核心は意思疎通のずれの緊迫度がにわかに高まり、質的な変化が起こされたことにある。

この新しい状況を踏まえ、**When she talked English** と表現し、**the maid's face tightened** と続く。英語が話され、笑って緩んでいたメイドの顔がこわばるのであり、ここでもアメリカ人女性はその顔に注目していることが窺われるが、英語を使った “she” は誰なのか。**When she talked English** は **Then...** 以下の母語による発話を含む経緯を敷衍したものであり、主語はアメリカ人女性だととる。他動詞 **talk** は主語の話者から見て自国語以外の言語を目的語とすることがあり、文脈から、主語はイタリア人メイドで、慣れない英語を操る緊張に顔を強張らせたともとれる。一方、「特定の状況である言語で話す」とする用法もあり、この物語がアメリカ人女性のイタリア語とのもどかしい取り組みを軸とし、イタリア語による発話の大半は彼女が発し、それと聞きとり、受けとめたものだとする本論では、**she** はアメリカ人女性であり、上記副詞節は、彼女が「メイドにとって外国語の」英語を話したととる。メイドが英語を使うとは一度も表現されていないことも確かなのである。

「復元」することによって、改めて明らかになったとおり、彼女が使ったイタリア語は初歩的な

ものであり、また、断片的な表現がほとんどであった。その意味で、ここでもメイドが目の中の相手に敬意を込めて三人称で呼びかける、*Venga, Signora* と *Si bagnerà*, そして、それに続く一人称複数形の *Dobbiamo rientrare*. も理解、聞き取り、推測可能な範囲内としたのだろう。そして、アメリカ人女性はするように了解し、*I suppose so* と応じている。これに対応する自然なイタリア語の文としては *Credo che abbia ragione* (英語の *I believe you are right* に中る) が相応だと、インフォーマントは示唆した。異存はないが、目的語としての名詞節での接続法の使用はアメリカ人女性の運用力を超えているかとも思われ、英語のままとした。さらには、コミュニケーションの頓挫にいらだち感情を母語で吐き出した後でもあるが、考えてみれば、英語によって思いの丈を吐出して以降、彼女の発話がイタリア語に戻るとする記述はないのだった。それまで共感を求めて格闘を続けていたイタリア語での意思疎通をもちや続ける気力も萎えた、猫がいないことを受け入れるしかないと観念したとすれば、ここは英語の発話が自然な流れであるとするのも可能である。

このような捉え方を踏まえると、最後に、タイトルの表現 *Cat in the Rain* が推測を誘う。ただ、文学作品のタイトルに見られる冠詞の有無をめぐる英語語法上の議論に加わろうとするのではない⁴⁾。そうではなく、それこそが、言葉の迷い、意思疎通のずれを中核とする女性主人公の状況をえぐるものとして採用されたと思われるのだ。このタイトルを、上にたどってきた方向でイタリア語に「戻して」みる。すると一対一に対応して、*cat in the rain = gatto nella pioggia* となり、すでに見たとおり、*a* または *the* に中る冠詞をつければ *un gatto nella pioggia* または *il gatto nella pioggia* となる。そのどちらもないことはどう捉えることができるであろうか。

インフォーマントは、滞在客とメイド間のやりとりの後半でアメリカ人女性の発する *il gatto* は、日常的なイタリア語としては異常で、*un gatto* とすべきだとコメントした。これに関しても、おそらく、ヘミングウェイは異常を承知の上でそのまま表現した。すなわち、まさにこの物語の状況の中核を生む大きな要素と本論で措定するアメリカ人女性のイタリア語の運用力、より直接には、物語中その象徴的な例であり、状況収斂のメタファーとも呼べる冠詞の混乱、それらのどちらにす

るかも覚束ない(と受け取られた)さまを反映するタイトルと思わせるに十分ではないか。言い換えれば、ヘミングウェイはこのようなコミュニケーションのずれを端的に表し、物語の中核に重なる表現をこそ小説のタイトルに選んだと思われるのである。

5

アメリカ人女性が上に見たような言葉の壁とも言えるものに跳ね返されるのは、ホテルの人々との関わりにおいてだけではない。いわば背後からも突き退けられているのだ。

共に旅する夫の間では、言葉は何の不自由もなく通じるが、「わかってもらう」実感が全く欠けている。しかも、夫はベッドで本を読んでいて、それほど真剣に妻に対応しているとは思えない。妻の切々たる悩みを思いやるどころか、なにが本でも読めと突き放しさえする。女性が性的関心を持たない場面を描くとして、ベッドには入るが、ランプをつけたまま本を読みつづける大人向けの一口漫画に典型的な情景のパロディーと言ってもさほどの的外れではないだろう。共感はいくらも拒絶されている。若い二人の関係は性愛にからむ最も親密なものはずであり、その中でなされる自然で当然な様々な要求に満ちている。また、母語による意思の疎通は、どれほど不自由であれ、言葉によるものとしてはそれ以上に頼れるものはない。理知的に、情緒的に、客観的に、そして主観的に。要求の婉曲な言い回しもたよれる可能性が高い。しかし、夫の究極的対応は読書に戻ることであり、現状のままでよい、妻の切実な求めには応じないにつきる。もっとも通じるはずの母語環境での共感の欠如に、女性のやるせなさは極限にあると言えそうである。

そして、仮に雨が上がったにしろ、旅はいつまで続くのか、どこに行くのかわからないようであり、女性が望むように、猫も飼い、髪型も女らしく、家具調度も自前の落ち着いた家庭を十分に享受する暮らし、実感が薄い外国語で真情を伝える必要もない生活がいつ実現するかもわからない。それどころか、そもそも夫婦間の感情の機微が母語でさえままならない。この物語は、本来的に、このような本当には理解してもらえない人間関係に封じ込められた女性の状況を立ち上がらせている。

猫探しを諦めたアメリカ人女性が雨を避けて中に入り、迎えた宿の主人が事務所から無言で挨拶をした折に、次の描写があった：**Something felt very small and tight inside the girl.** これを夫からの安心できる愛情と落ち着いた生活を望むアメリカ人女性の願望が「想像妊娠」の形で表現されているのだとする説があると聞く。それ自体に異議を唱えるわけではない。その方面の十分な知識はないが、ここに描かれたような状況下で心身に関わる現象としてありうるだろうと思う。しかし、彼女の体内に感じられた「とても小さく引き締まったもの」には、別の捉え方も可能である。

なによりもまず、彼女の状況は自然な感情の言葉やふれあいをとおしたやり取りがなされ、暮らしの自然な諸相が生まれ、積み上げられて、日々が築かれていくようなものではない。その中で、日常的な表現なら「わだかまり」、造語が許されるならば、“emotional constipation” とでも呼べようか、心身の悶えから生まれ、自然に「排出／排泄」されない情緒が、隠微にしかし容赦なくいびつに膨らみ、滞り、抱え続けられているものを言うのではないか。そして、物語の展開から判断すれば、彼女の望みは夫とのやり取りではぐらかされるばかりであり、意に沿うものがなにも育まれないうまに、宙ぶらりんの旅がさらに続きそうでしかない。彼女の抱えるものはさらに大きく育っていきそうである。しかし、陽の目を見る見通しはない。仮に「排出」されるとしても、「想像流産」ならぬ、なんらかの「死産」が物語の要請するものであろうか。

【仮説4】 さらに、ヘミングウェイとジョルジョ・デ・キリコの作品、少なくとも、それぞれの「雨の中の猫」と“Mystery and Melancholy of a Street”とは響き合うものを提示する。

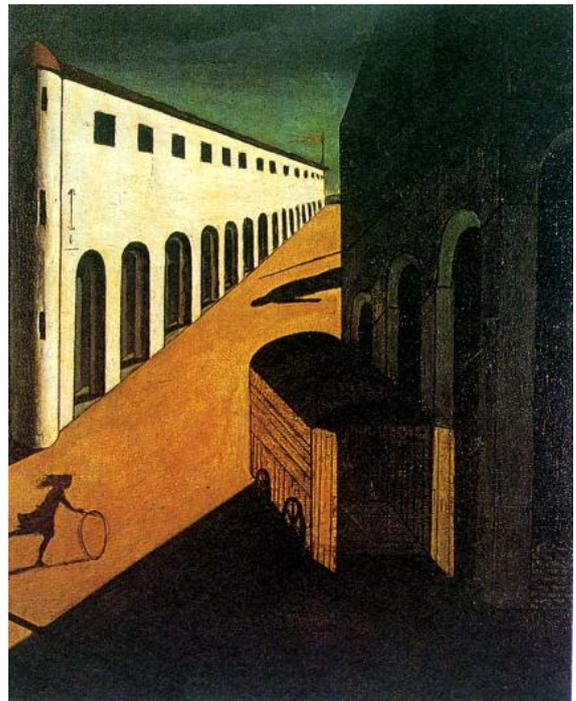
6

物語で、猫がいたと知っている、あるいは、猫を見たのはアメリカ人女性客だけである。そして、騒動の挙句、主人の指示によったか、メイドが部屋に持ってきてくれたのは（おそらく）似ても似つかぬ別の猫であった。

ヘミングウェイと画家セザンヌとの関わりは論じられよく知られているが、同じく画家のキリコとのそれはあり得ないだろうか。1918年5月、

第一次世界大戦に赤十字の一員として北イタリアの戦線に赴いたのに始まり、戦後カナダ紙の特派員としてパリに渡り、芸術家サークルで知り合ったガートルード・スタインらとの交流の中から作家への道を進み、さらには30年代にはスペイン内戦に深く関わっていったことは、ヘミングウェイの伝記上の基本的な情報と言える。他方、時代的にはほぼ重なるように、キリコは1910年代以降目覚ましい活躍を続けていた。セザンヌに関心を持つとすれば、直接の関わりとまでは言わないまでも、同じようにジャンルを別にしながらも時代的には重なり、ヘミングウェイがキリコの存在を知り、彼の絵の特異な魅力に注目していた可能性はあるのではないか。そして、取り上げているこの短篇小说、1925年に発表される“Cat in the Rain”と同時期に活躍していたキリコの極めて個性的でよく知られた絵画とがひびきあうものを持つように思われるのだ。

特に関心を引くのは、キリコ1914年作とされる“Mystery and Melancholy of a Street”である。この



Giorgio de Chirico,
“Mystery and Melancholy of a Street”^[5]

絵は何を語るであろうか。まず、前景と言えそうな部分に少女が輪回しをしている。走って向かう先は町の広場であろうか。あるいはタイトルの言うように一本の街路であろうか。その姿は、本人、

建物及び広場／街路にさしている陰から判断して右斜め前方の方角からさす陽の当たる部分はずかでも見えてよさそうだが、黒一色で影絵のようである。姿だけに絞れば、あたかも陽は少女の向こう、絵を見る者の正面からさしているかのようだ。しかし、彼女自身の陰も右斜め前方の方角からさす光によるように背後に描かれてはいるが、建物の陰と角度がずれており、混乱のままに納得を強いる。

そして、影の指す方向などから少女と同じ平面に老人と思しき影がある。あるいは、キリコの絵画によくある広場に立つ何らかの神話的な彫像、あるいは歴史上の英雄かとも思わせるが、少女との空間的な関連だけならば、同じ空間に属すると言えそうな大きさで、自然な位置関係にあると思われる。しかし、左側の柱廊のある建物と関連付けるならば、それは異常な大きさでなければならない。

それだけではない。彼らの平面は、同じ建物にあてはめられている遠近法によって、なにかまくれ上がりそうである。右手前の似たような建物も、同じように、周囲との関連を乱すような落ち着いた遠近法で描かれていて、絵を観る視線に近い広場の部分を逆に押し沈めるかのようであり、さらには、その壁に沿って置かれている馬車と関連づけると、空間がねじれてきしむかのようなのである。そもそも、左の白い建物と右手前の建物の陰に区切られ、画面の奥へと続く日が差した部分だけが神秘的で憂鬱な「道路」なのであるか。だとすれば、老人／彫像の居場所はどこになるのだろう。さらに、少女がどの方向に輪回しを続けるのかもおぼつかなくなってくる。

このような矛盾する角度を孕み、一貫性が読み取れない威圧的な遠近法に平衡を奪われ、巨大な石造建築が占有しながらも歪んだ奇妙な空間に、輪回しをする少女がいて、その場にふさわしくない大きさが押し付けられた異様な老人の影がさしている。観ていると、視線は手前に置かれた馬を運ぶものかと思われるが、馬が繫れてはいない馬車は隣の建物の黒い影に抗うように寸胴で、置かれている平面が建物のそれと同じとは思えない。しかし、馬車を通過して角を曲がれそうな気もして、少女が向かうらしく、また老人／彫像がそこに立っているかと思わせる向こうの広場へと誘われる。しかし、角を曲がった先には、広場はおろか地続きで安心できる平面があり、絵を見

て影からそれと察せられるような人がいる／像があるなど、なにも保証されていない。このように惑わされると、観ている者は、あたかも、窓から見えた猫を求めて雨の中に出、小石を敷き詰めた軒端を伝って、向こうにあるはずの空間に進んでいき、猫を探そうとしたアメリカ人女性と似たような立場に置かれた感覚に襲われる。

別の言い方をするならば、アメリカ人女性が雨の中に見たという猫は、キリコのより後年の絵画に見られる「形而上的情景」のようなものなのであるか。彼女が共有するはずの現実のホテルの空間世界の人々にとって、アメリカ人女性が見た、または見たと信じ込んでいる「庭のテーブルに雨宿りする猫」は、「形而上的な猫」などと大仰に言わないまでも、その実在は信じられないものでしかないであろうか。そもそも、メイドが客室に抱えてきた大きな猫以外に「形而下の」猫はいないのであるか。（すると、冠詞を欠くタイトル“Cat in the Rain”が、un gatto と il gatto をめぐる差異や、やり取りにおける意味合いのずれ、意思の疎通の滞りなども含みながら、小説の重要な要素である「そもそも猫などいなかったのでは？」とアメリカ人女性に諦めを促すような疑念の膨らみを的確に反映することになり、この小説を感覚と認識を揺るがせるキリコの絵の世界と一層響き合うものにすると言えるかもしれない。）

すなわち、この小説は、キリコに倣えば、「通りの神秘と憂鬱」ならぬ、海に近いホテルの前にありなんらかの記念碑も据えられている「広場の神秘と憂鬱」Mystery and Melancholy of a Public Gardenを描くものと言うことはできないであろうか。

このように考えると、さらに、芸術創作とその背景の中にヘミングウェイとキリコとの交流、あるいは、少なくともキリコからヘミングウェイへの何らかの影響を推定したくなる。論証はとても筆者の力の及ぶところではないが、可能性はないであろうか。交流の背景を考古学的に発掘し、合わせてヘミングウェイの読み解きを進めることで、何か生まれたいであろうか。

引用文献

[1] テキストは“Ernest Hemingway - ‘Cat in the Rain’ - After English.” www.english.heacademy.ac.uk

を援用。(2015年12月25日検索)

[2] イタリア語の「復元」に関しては, Isabella Dionisio 氏の助力を仰いだ。氏はイタリア語を母語とし, 日本文学の研究者兼翻訳家であり, 2016年2月現在, 日本に在住している。示唆された表現の採用, その結果としての論考についての全責任が山名にあることは言うまでもない。

[3] 一ノ瀬俊和. しっかり学ぶイタリア語 文法

と練習問題. 東京・ベレ出版, 2001.

[4] 例えば, 栗原 裕. 英語定冠詞の語用論-ケース・スタディー. 大妻女子大学紀要-文系-. 2015, 47, pp. 71-82.

[5] Wikiart VISUAL ART ENCYCLOPEDIA を援用.
<http://www.wikiart.org/en/giorgio-de-chirico/mystery-and-melancholy-of-a-street-1914> (2015年10月22日検索)

Abstract

Ernest Hemingway's "Cat in the Rain" has its characters communicating in English and Italian. Yet, when closely checked, the exchange is conducted more in Italian and less in English than in the published version. Moreover, some obviously irregular expressions in Italian intrigue one to assume that the American woman's limited proficiency in Italian plays a substantial part in the story. This viewpoint promotes, as the import of the story, the wife's struggle and gnawing sense of insecurity trapped between her husband's indifference and her poor rapport with the hotel people, while on their seemingly little planned travel which does not promise a settled and fulfilling life she longs for.

Overlapping this imagery, there looms up Giorgio de Chirico's "Mystery and Melancholy of a Street," the enigmatic painting of 1914. The motif of a cat sighted, not retrieved but replaced with a different one contains an inevitably loose yet convincing similarity to that of the shadow of the old man/statue-monument in the solidly structured visual confusion of the painting. One might be intrigued to imagine a more substantial and long-range artistic sympathy between Hemingway and de Chirico, who supposedly shared time and space in the modernistic European art scene of the first half of the twentieth century. Paul Cezanne is a well-established influence on Hemingway, a fact which should none the less encourage a search into that of Giorgio de Chirico.

(受付日: 2016年2月11日, 受理日: 2016年2月19日)

山名 章二 (やまな しょうじ)

大妻女子大学名誉教授

Indiana University MA (English), 筑波大学博士 (文学)

専門はアメリカ文学。現在は Eugene O'Neill の後期作品について自伝的要素に焦点をあてた研究を行っている。

主な著書: 自伝と鎮魂 ユージーン・オニール研究 (単著, 成美堂)